

熱川温泉病院

症 例 概 要 患 者：80代 男性

病 名：進行性前立腺癌

入院期間：2025年5月～2026年4月

2025年4月当院へ転院前の前病院にて予後は長くても半年とのICが行われていた。その後、療養目的で2025年5月に当院転院となる。医師、看護師、セラピスト、管理栄養士、相談員による多職種カンファレンスを実施し、前立腺癌の進行に対して疼痛緩和を行ないながら、「可能であれば在宅復帰」を共通目標に支援を継続。2025年10月及び12月にはACPを実施、「食べたいものを食べる」「会いたい人と過ごす」という患者さんの希望を実現する方針とした。食べることが大好きな患者さんのご希望を叶えるべく、様々な工夫とご家族の協力により誕生日会や病院庭園での花見を楽しまれるなど終末期の患者さんのご希望を叶えることができた症例です。

内 容

入院当初、食欲低下による低栄養・低体重状態にあり、全身筋力や耐久性の低下を認めていました。医師、看護師、セラピスト、管理栄養士、相談員による多職種カンファレンスを実施。前立腺癌の進行に対して疼痛緩和を行いながら、病状を踏まえつつも、「可能であれば在宅復帰」を共通目標とし、身体機能の維持と介助量軽減を目指して支援を継続しました。

2025年10月及び12月には、ご家族、多職種スタッフが参加するACP（アドバンス・ケア・プランニング）を実施しました。その中で主治医から「ご本人が動ける今のうちにご家族との思い出を作しましょう」と提案があり、「食べたいものを食べる」「会いたい人と過ごす」という患者さんの希望を実現していくことがチームの方針となりました。

そこで、看護師とセラピストは、食事車椅子離床時の姿勢が崩れることが多く、誤嚥するリスクがあることから、協力してクッションを工夫してポジショニングを行ったり、リクライニング車椅子を利用したりして対応。長時間姿勢を保持し、誤嚥することなく、ご家族と団らんしながら安心して食事することが可能となりました。

2026年1月、ご家族と地元のカフェへ外出し、大好きなコーヒーやプリンを味わい、さらに翌月にはご家族をお招きしてご本人の誕生日会を開きました。好物の鰯のたたきを召し上がり、そのままご家族も一緒に宿泊され、庭園の河津桜を鑑賞するなど、かけがえのない思い出を作ることができました。

2026年3月に全身状態が悪化し、翌月ご家族に見守られながら永眠されました。亡くなる数日前まで

大好きなプリンを召し上がられていました。後日、ご家族からは「こんなに元気でいられるとは思いませんでした」と感謝のお言葉をいただきました。

本症例は、余命宣告を受けた患者さんに対し、多職種がACPを通じて思いや価値観を共有し、「好きなものを食べること」「大切な家族と過ごすこと」といった人間が本来持つ願いを実現した症例でした。終末期医療でも、健育会が目指す患者さんの尊厳を尊重し、多職種が「One Team」となって寄り添うことの大切さを改めて実感しました。

【各職種の関わり】

○主治医は泌尿器科専門医と協力し経過観察。経口摂取可能で月1度のニューブリンとカソデックス投与にて、バイタルサインの著変もなく過ごすことができた。

○看護師は褥瘡予防のためワセリンで保湿。転倒転落に注意し、ポジショニングを実施。

○セラピストはシーティングや頸部・肩甲帯等の可動域訓練、スプーンの調整を行い、誤嚥することがなく自己摂取を維持できるように介入した。

○管理栄養士は栄養状態を管理。特別室で宿泊された際は、調理師が好物の鰯のたたきを特別に調理し提供した。

○相談員はご家族の窓口として、要望を傾聴。外出時には介護タクシーを手配、ご家族の宿泊時には日程調整役を担った。